

CASE

学び合い・協同学習の全校導入による 生徒の学習意欲と理解度の向上

高校 情報

基本情報: 岡山県立邑久高等学校 / 公立 / 普通科(単位制) / 共学
規模: 各学年約160名 1学年 4クラス、2学年 4クラス、3学年 4クラス
主な進路状況: 4年制大学 106名、短大 10名、専修学校等 60名(現役・既卒含む)

ポイント

- 学び合いを全校で導入し、授業の形式を変えた
- 生徒の姿勢が変わり、授業中の学習意欲・理解度が高まった
- 先生も授業中に生徒を見る時間が増え、理解度をより把握できるようになった

I. 高校の紹介

同校は 1921 年に開校された、岡山県東部に位置する普通科公立高校である。教育目標は「健康明朗」「質実勤労」「自律協同」「敬愛親和」。2006年4月より単位制に移行し、既存の教科・科目だけでなく、生徒の興味・関心、進路希望に応じた幅広いニーズに対応するため、多くの学校設定科目を用意している。全生徒の約80%が部活動に参加し、金曜日を「部活動の日」とするなど、学校をあげて部活動の活性化も進めている。

II. 取り組みに至った背景

高校入試制度の改編や私立高校の特色化などを機に新入生の学力低下が見られ、高校での学習にうまくついていけない生徒も目立ち始めた。また真面目な生徒が多く、宿題をしっかりとこなす授業中もノートを取ってはいるが、テストになると学習内容の定着が不十分な状況で、先生方の中には現状の指導方法に課題を感じるようになってきた。そういった声がついには学校全体の大きな課題となり、2009年度には学力向上プロジェクトチームを立ち上げ、どのようにすれば真の学力をつけることができるかを研究した。その結論として出たのが「学び合い・協同学習」の導入だった。

III. 取り組み導入まで

導入にあたり、実践校の視察や校内での公開授業などの研究を重ねた。視察を経て、2009年よりプロジェクトメンバーの担当教科(1年数学)でパイロット的に学び合いをスタートさせた。

取り組みを始めてすぐの5月に取った生徒アンケートでは、半数以上の生徒が「(どちらかというを含む)グループ学習の方が力がつく」と答え、さらに授業中の生徒の様子、理解度を見ても手ごたえを掴んだことから、他のメンバーの教科(2年現代文)にも取り組みを広げ、年2回の

教員間の公開授業を通して、徐々に校内での認知を広げていった。

公開授業で留意した点は、特段な準備をしていない普通の授業で学び合いの様子を見てもらい、他の先生に「これならできそう」「やってみたい」と取り組みやすく感じてもらうことであった。新しい指導法を広めるには公開授業が効果的だが、特定教科に関わる「教科の指導スキルの共有」ではなく、教科の枠を取り払った「学び合わせる形」のベースの部分の共有を目指した。

■ 1年5月の生徒アンケート(抜粋)

- ・教えることによって自分がどのくらい理解しているかわかる
- ・一斉授業だと分からなくてもなかなか「分からない」と言えない
- ・先生より友達の方が聞きやすい
- ・説明をもっとしてほしい

当初は「学習進度が遅くなるのでは」「ハイレベルの課題が出せなくなるのでは」といった不安の声も挙がっていたが、公開授業などで実際の生徒の様子を見る中で理解が深まり、2010年4月より全校あげて取り組むことになった。

4月当初には、下記参考資料①のように、学び合いの授業ですぐに、かつ静かに机を移動して話し合いができるよう、机の脚にテニスボールをつける工夫も行った。

(参考資料①)



IV. 取り組み内容

同校での学び合いのポイントは、以下の4点である。

- ①生徒に「学び合いの意味」を説明する。
- ②先生は説明しすぎない。我慢する。
- ③授業で学んだことを振り返らせる。
- ④全ての授業で学び合いを入れる必要はない。

①生徒に「学び合いの意味」を説明する。

学び合いの授業では特に成績上位層の生徒から「もっと説明してほしい」「なぜ分からない子に教えなければならないのか」という声が挙がるため、学び合いを導入する際は最初に生徒に学び合いの意味や目的を説明した。「教えることで自分の理解が深まる」「相手と話すことで違う考えに触られる」「社会に出ればチームで仕事をする。その時に必ず教えたり教わったりするのだから、その土台となる力も付く」「成績の良い生徒にも力が付くと信じてやっている」といった内容を伝えると、生徒たちは納得して授業に取り組むものだと先生方は語る。

②先生は説明しすぎない。我慢する。

「学び合いの本質は、教員は大切なことだけを説明し、分からないことは友達に聞くことです。これまでは分からない人には全て教えていましたが、教員の仕事は教えることではなく、生徒に学ばせることだと思います。」と先生が語るように、新しい概念は教えるが、材料を与えてあとではできるだけ考えさせることを意識している。

この「説明しすぎない」は大きな効果をもたらした。説明が最小限になったことで生徒が自分で調べたり友達に質問したりする習慣がついたことだ。学び合いの授業の感想を生徒に聞くと、「頭を使う」「疲れる」と返ってくるが、それはこれまでのような授業がただノートを写す時間から、自分の頭で理解しようとして、考えている時間になった証拠と言える。

③授業で学んだことを振り返らせる。

学び合いの授業では必ず、最後にこの日の授業で学んだことを再度自分の言葉で言わせたり書かせたりしている。一度聞いて理解しただけでは学習は定着しないため、授業の振り返りをさせることで、何が分かって何が分かっていなかったかと頭の中を整理させることを目的としている。

④全ての授業で学び合いを入れる必要はない。

全校で学び合いを導入した同校ではあるが、全ての授業の全ての時間で学び合いをしているわけではない。新しい概念を教えるときなど一斉授業の形式が効果的なときは、学び合いの形式を取る必要はない。ただその際も、普段の学び合いでの効果が出ており、生徒は先生が最小限の説明しかされないと思っているため、以前よりも集中し

て聞くようになった。また定着度の確認は以前と同様に小テストや定期考査で行っている。特に問題構成は変更していないが、小テストも個人で何点以上と目標を設定するのではなくグループ全員で何点以上を取りなさいと目標設定を変えることで、ここでも学び合いが促進されるような工夫もされている。

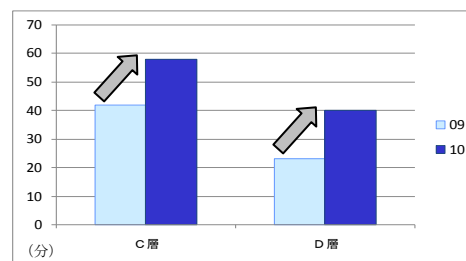
V. 取り組みの成果

①生徒にとって

アンケートによる評価の高さは前述の通りだが、「見えない力」(学ぶ姿勢や教え合う姿勢)は高まっていると先生方も感じている。先日も進路室で生徒同士が「まなびあい～」と教え合って勉強する様子が見られるなど、社会に出ても役立つ力が身に付いているようである。

一方「見える力」(学習内容の定着)の測定はこれからの課題だが、スタディーサポート1年2回の結果でも学年のD層(学力下位20%)の学習時間や授業理解度が前年比で高まるなど、学年全体の学習意欲や理解度の向上に向けて一定の成果は出始めている(参考資料②)。

(参考資料② 学力層ごとの平日の学習時間)



②先生にとって

一斉指導では授業内容の定着度がテスト結果で分かることが多かったが、生徒の顔を見る時間が増えたことでその場ですぐに生徒の理解度を把握でき、授業の改善や修正が容易になった。

また、職員室でも授業の話が増えるようになった。学び合いでは授業の進め方、生徒の動かし方が大きく授業理解度に関わってくるが、教科特有のスキル以外の部分では教科を横断した相談も頻繁に見られるようになった。

VI. 取り組みに対する今後の展望

このように先生方も強い手ごたえを感じられている取り組みだが、今後の課題は2点ある。1点は客観的な評価。意識面の評価は大学研究者との共同研究を視野に入れているが、学力面の評価は何をもって学力とするか定義付けが難しく評価方法が課題である。もう1点は近隣中学校との連携。相互の公開授業を促進することで中高のギャップを少なくし、近隣の中学生がスムーズに同校に入学しやすくするためだ。

同校の学び合いによる挑戦はこれからも続く。